

## 島根県の小学校精神薄弱児特殊学級の実態について

稲浪 正充\*, 藤田 正一\*\*, 内田 祥治\*\*\*

---

A Survey of the Special Classes for the Mentally Retarded (Primary School) in Shimane Prefecture.

---

### Abstract

For the purpose of the research of special education for the mentally retarded of primary school in Shimane Prefecture, we asked for 116 teachers of the special classes to answer the question as to their 322 students. And, 71 teachers answered our survey.

1. Intelligence quotient of 199 children who attended their special classes was as following: immeasurable and under 25; 7.5%, 26-50; 12.6%, 51-75; 48.7%, 76-85, 12.1%, over 86; 5.5%, and no discriptive; 13.6%.

2. To assess intelligence quotient, 41 teachers used WTSC or WISC-R, 13 teachers adopted Tanaka-Binet, and 7 teachers applied Suzuki-Binet.

3. Among 71 teachers who answered our question, only 7 teachers had a decade experiences of special education for the mentally retarded.

4. 62 teachers adopted any kind of play to make instruction, and all classes had some educational planning of integration.

5. 86 mentally retarded students were picked up, and asked as to their daily life. The results indicated us that toileting and speech were specially difficult for them.

6. 81 mentally retarded students was checked to show many problemed behavior. Results showed us that the teacher of special education should accept fear, anger, and sorrow of them, and had to try to make them sure and self-respective.

### はじめに

島根県で精神薄弱児のための特殊学級が発足したのは、昭和24年だった。浜田市の原井小学校では、研究的に昭和4年に精神薄弱児のための特殊学級が設けられたが、その後中断し、その設置が正式に許可されたのが昭和24年だった。この年には、出雲1中にも精神薄弱児特殊学級が発足した。

こうして昭和30年代から昭和40年代にかけ、特殊教育の先達の試行錯誤があり、昭和54年に心身障害児の全員就学が実現したのだった。これからも特殊教育の充実のための地道な努力がなされねばならないが、われわれは昨年秋に小学校精神薄弱児学級についてのアンケート

調査を行ったので、その結果についてここに報告する。

### I 対象と方法

島根県には小学校に併発された精神薄弱児学級が116学級あり、322名の児童が在籍しているが<sup>1)</sup>、昭和56年秋に学校長を通じて特殊学級担任教師にアンケート調査を依頼した。回答は71名の教師からよせられた。

A 特殊教育の実態について教師が担任している199人の児童のIQ分布、採用している心理テスト、教師の経験年数、指導計画についての調査を実施した。

B 教師が担任している199人の児童のなかから、任意に選んだ児童について跡見一子<sup>2)3)</sup>が作成した生活行動調査とABSの第2部を参考にして作成した問題行動についての質問紙に回答を求めた。前者については86名の児童について、後者については81名の児童について

\* 島根大学教育学部障害児研究室

\*\* 出雲養護学校

\*\*\* 緑が丘養護学校

回答が寄せられた。また、コントロール群としてS小学校の普通学級児童1年生61名に両調査を実施した。

## II 結果と考察

### A 特殊教育の実態

#### a IQ 分布

本調査では特殊学級の71名の担任教師が受持っている199名の児童についてのものである。この調査(表1)は特殊学級に在籍している全児童322名の%弱についての結果であり、精神薄弱児学級全児童のIQ分布を正確に表わしてはいない。なお、若槻力夫<sup>4)</sup>が昭和51年に行った島根県の小学校児童と中学校生徒についての調査と比較するとき、IQ値の51から75の間の子どもが共に50%弱含まれているが、若槻氏の調査に比べ、今日の調査では測定不能の子どもを含めたIQ値の低い子の入級の割合がわずかに増加し、IQ値の高い子の入級の割合が少し減少している。

#### b 心理テスト

子どもの状態を客観的に把握するために教師が採用している心理テストについて調査したが、WISCは36学級、田中一ビネーは13学級、鈴木ビネーは7学級、教研式は6学級で用いられていた。また、5学級で使用されていたのはWISC-R、ITPAであり、4学級でのものは大脇式、3学級でのものはグッドイナフ、適応行動尺度、2学級でのものはフロスティック視知覚、K式、遠城寺、CLAC IIIとなった。

#### c 教師の経験年数

教師の特殊教育経験年数を調査したが、71名の教師のうち61名からこの項目に回答が寄せられ、10名からの回答がなかった。経験年数の1年未満のものが17人、1年から2年未満のものが10人、2年から3年未満のものが5人、3年から7年未満のものが14人、7年から10年未満のものが8人、10年以上のものが7人となった。

#### d 指導計画

指導計画について、時間割の編成、遊びをとり入れた指導、交流教育について調査を行った。

##### (1) 時間割の編成

特殊学級の時間割編成は比較的教師の自由は裁量に委ねられているが、表2は教師に求めた特殊学級の授業科目と週授業時間数をまとめたものである。

国語、算数の指導方法をみると、両科目で一斉指導を主にしているところは、いずれも2学級だけであり、残りの69学級では、個別指導と一斉指導をくみ合わせてとり入れたり、個別指導を主にしていた。また、生活単元的色彩の強いものは、国語では9クラス、算数では12クラ

スにみられた。生活単元学習と教科学習を半々にとり入れているものは、国語では1クラス、算数では4クラスとなった。また、教科学習を中心にしたものは、国語では4クラス、算数では9クラスになった。

音楽と体育では交流的形態が多くみられた。普通学級で授業をうける時間と、特殊学級で授業をうける時間のあるものが、音楽では10クラス、体育では12クラスになり、普通学級で授業をうける子と特殊学級で授業をうける子に分かれるものが音楽で7クラス、体育で6クラスになった。これにたいして、特殊学級内だけで授業をうけるものは、音楽では17クラス、体育では8クラスにみられた。

特殊教育では、社会科、理科、家庭科を合せて生活科として授業をしてもよいのだが、国語、算数、音楽、図工、体育の5教科に生活科を加えた6教科で授業をしているところが24クラスに、低・中学年の段階では生活科を採用し、その後の段階では、社会、理科、家庭の各教科で組織したり、この3教科と生活科を合せて時間割を作成するものが20クラスに、社会、理科、家庭の3教科を廃止せず、生活科を採用し、9教科で各教科で内容を組織するものが13クラスに、生活科を採用せず、8教科で時間表をつくるものが8クラスにみられた。

##### (2) 遊びをとり入れた指導

特殊教育の授業のなかに、遊びをとり入れる試みが最近ふえているが、小笹裕子、塩野祐子が昭和55年に実施した調査<sup>註)</sup>によれば、遊びを特殊学級の授業にとり入れた時期について回答を寄せた37学級のうち、昭和40年代のものは、昭和41年1、昭和47年1、昭和49年1と3学級であったが、昭和50年代に入って急激にふえ昭和50年3、昭和51年1、昭和52年2、昭和53年9、昭和54年8、昭和55年11となっている。このように昭和50年代に入って、指導に遊びの要素をとり入れるところがふえてきている。

さて小笹、塩野の昭和55年に調査したときは、表3のように、遊びをとり入れている学級が47クラスでとり入れていない学級が11クラスであったのに、本調査では遊びをとり入れている学級が62クラスでとり入れていない学級が4クラスという結果になった。

また、遊びをとり入れた学習の指導形態として遊ぶことのできない子を遊べるようにすることを狙った「遊びの学習化」と教科内容を習得しやすくするために遊びを手段に使い、遊びをとり入れた場面のなかで学習を行う「学習の遊び化」に分けると、回答を得られた62学級のうち、前者が14学級に、後者が44学級にみられ、いず

註 小笹裕子、塩野祐子：障害児教育における「遊び」について、昭和55年度島根大学教育学部卒業論文

表 1 特殊学級入級児童のIQ分布

IQ		測定不能	～25	26～50	51～75	76～85	85～	不明
若槻の調査 <sup>注)1</sup>	%	3.5	0.4	9.9	49.8	19.8	10.7	6.0
本調査	%	7.0 (14)	0.5 (1)	12.6 (25)	48.7 (97)	12.1 (24)	5.5 (11)	13.6 (27)

注) 1 若槻の調査は、昭和51年に実施され、小学校・中学校の児童・生徒を合わせたものである  
 注) 2 カッコ内は児童・生徒数

表 2 特殊学級の授業科目と週授業時数

	本調査による特殊学級の週授業時数										普通学級の週授業時数	
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9		10以上
教 科	国語			2	7	7	13	19	10	8	1	1.2.3.4年… 8, 5.6年… 6 1年… 4, 2.3.4.5.6年… 5 2 2 3 1.2年… 2, 3.4.5.6年… 3 1.2年… 2, 3.4.5.6年… 3 5.6年のみ……… 2  1
	算数			5	10	16	22	12	2	1		
	音楽	1		55	7	4						
	図工	1		48	9	3						
	体育			7	57	2						
	社会	44	2	7	10							
	理科	40	6	10	7							
	家庭	30	2	31								
	生活	8	1	2	3	1	12	13	14	7	2	
	養護・訓練		6	2	1	2	2					
	日常生活指導		3	1	1	1	1	2				
	生活単元学習				1	1	1	1				
	作業学習	4	3	2								
道徳	37											
特活	18	27	17	4								
別動	27	15		1								

表 3 指導に遊びをとり入れている精神薄弱児学級

	昭和55年	昭和56年
島根県の精神薄弱児学級	110	116
アンケート回収学級	70	71
遊びをとり入れている学級	47	62
遊びをとり入れていない学級	11	4
不明	12	5

表 4 遊びの種類

模倣遊び	6学級
人と人との関係の遊び	3学級
ごっこ遊び	25学級
からだを使う遊び	28学級
物を使う遊び	31学級
ことばに関する遊び	17学級
ゲーム	15学級

れとも区別しにくいものが4学級となった。また指導のなかで主として何を目標とするかをみると、回答のあった57学級のうち、知的発達か30学級、社会性発達が8学級、身体的発達が7学級、情緒安定が6学級、いずれとも決めにくいものが6学級となった。

さらに、遊びの種類を森上史郎・柚蔵<sup>5)</sup>の分類を参考に分け、教師に指導のなかでとりあげているすべての遊びの種類について回答を求めたが、結果は表4のようになった。

表 5 普通学級で授業をうける科目の順位

順位	授業科目	学級数
1	体育	60
2	音楽	51
3	家庭	24
4	図画工作	20
5	社会	10
6	理科	7

表 6 他校の特殊学級との交流

松江市	市内の小学校の特殊学級が参加するものと、北部地区と南部地区とに分かれて参加するものがある。市内の小学校の特殊学級が参加するものとして、体育会、遠足、学習発表会、作品展などがある。北部地区の特殊学級が合同で行なうものでは、合同学習としてのきつまいも作りや合宿などがあり、南部地区では週1回の合同学習を行なっている。
〔安来市 能義郡〕	小・中学校の特殊学級が合同で運動会、はげつり大会、作品展など行なっている。
八束郡	郡内の特殊学級が集まって行なうものと、各町で行なうものがある。郡で行なうものは、年2～3回の交歓会として、もみじがり、クリスマス会などがあり、各町で行なうものとしては学期に1回ずつ、おたのしみ会など交歓会をしている。
〔大原郡 飯石郡〕	両郡内の小・中学校の特殊学級で、運動会、臨海学校、学習発表会、作品展、そして、合同学習を年2回行なっている。
出雲市	市内の特殊学級と養護学校と合同の運動会、特殊学級で行なう親子ハイキング、六年生を送る会など行なっている。また、数校の特殊学級だけで、七夕会、クリスマス会を行なっている。
簸川郡	郡全体としてではなく、各町において、小・中学校の特殊学級で、合同学習、交歓会、宿泊訓練、写生遠足、作品展など行なっている。しかし、町によっては、行っていないところもあった。
〔大田市 邇摩郡〕	小・中学校の特殊学級で、月1回合同学習として、運動会、七夕会、宿泊訓練、学習発表会、お別れ会など行なっている。
浜田市	市内の小・中学校の特殊学級合同で遠足、学習発表会及び作品展を行なっている。
江津市	市内の特殊学級合同で遠足や合同学習として文集作り、調理、焼作など行なっている。
〔益田市 美濃郡〕	市・郡の合同学習として、リンゴがり、卒業生を送る会、また、合同学習を行なっているところもあった。
隠岐郡	郡全体として体育会、作品展、サマーキャンプを行なっている。また、島独自で合同学習を学期に1回以上行なっているところもある。

## e 交流

交流についての質問には68人の教師からの回答があったが、回答があった68クラスはすべて何らかの形で交流が行なわれていた。

校内交流では、普通学級の授業に参加しているのが62クラス、参加していないのが6クラスとなった。これは特殊教育総合研究所の専門研修生<sup>6)</sup>が昭和54年に調査したときの77.0%に比べ、91.2%と高かった。また、本調査で普通学級で授業をうけているクラスの数とその順位は表5のようになったが、1位から5位までの順位は特殊教育総合研究所の調査結果と同じであった。このように精神薄弱児学級の子どもは、体育と音楽の授業を普通学級の子どもと一緒に受けていることが多い。さらに、児童会活動、クラブ活動、全校活動、クラス会活動での交流もさかんだった。

校外との交流では、郡や市を単位とした他校の特殊学

級との交流が行われていた(表6)。地域社会との交流についてはほとんど回答がされていなかったが、交流をしている学級の例をあげると「ライオンズクラブによる招待遠足」に行っているクラスがあった。また、昭和56年は国際障害者年で、それに関連しての障害児フェスティバルが松江市と浜田市で行われた。

## B 児童の問題行動

## a 生活行動調査

昭和53年に跡見一子らが東京の普通学級児900名を対象に、食事、排せつ、言語、くせ、体の調子、性質についてアンケート調査を行ったが島根県下の精神薄弱児学級在籍児童86名とS小学校1年生61名について同じ調査を行った。調査の結果は表7のようになった。

跡見氏らの行った東京の小学校低学年児童とS小学校1年生児童との調査項目の比較をみると、偏食、おそ

表 7 生活行動調査の結果

調査項目	学 年		中 学 年		高 学 年		全 体		S小学校 1年生 61		
	学 級	人 数	精 神	普 通	精 神	普 通	精 神	普 通			
			薄 弱	21	304	35	309	30		287	86
A 食 事			%	%	%	%	%	%	%		
ア 偏食 a) b)			28.6	31.6	22.9	31.1	3.3	28.9	17.4	31.6	13.1
イ 食欲不振・小食			14.3	20.1	11.4	12.9	6.7	9.4	10.4	14.2	19.7
ウ おそたべ a)			42.9	40.5	40.0	28.2	30.0	19.2	37.2	29.5	16.4
B 排 せ つ											
ア 頻尿 a) b)			33.3	7.9	20.0	8.1	16.7	5.9	22.1	7.4	1.6
イ 遺尿 a) b)			9.5	3.0	20.0	2.6	10.0	0.3	14.0	2.0	—
ウ 遺糞 b)			—	1.6	8.6	0.6	10.0	0.7	8.1	1.0	1.6
C 言 語											
ア ことばのおくれ a) b)			66.7	2.3	45.7	1.3	20.0	3.5	41.9	2.5	—
イ 赤ちゃんことば b)			23.8	3.9	20.0	1.9	10.0	2.3	17.4	3.0	4.9
ウ どもる			—	1.0	2.9	2.3	6.7	—	3.5	1.1	—
エ ひとりごと a) b)			14.3	4.3	17.1	3.6	16.7	4.2	17.4	4.1	1.6
オ 発音不明 b)			38.1	6.3	40.0	8.1	23.3	4.5	33.7	7.0	1.6
カ おしゃべり a)			23.8	28.6	20.0	29.1	33.3	21.3	24.4	25.8	8.2
D く せ											
ア 指しゃぶり			14.3	6.6	14.3	7.8	3.3	2.8	10.5	5.8	6.6
イ 着物をかむ a)			—	3.9	2.9	0.6	—	1.0	1.2	1.9	—
ウ 爪かみ a)			—	12.2	8.6	18.4	10.0	15.3	7.0	15.5	—
エ 奇 声			4.8	5.3	14.3	7.4	6.7	9.4	9.3	7.5	1.6
オ 性器いじり			19.4	3.9	2.9	2.3	3.3	0.7	7.0	1.7	3.3
カ 目ばたき a)			9.5	4.6	—	3.2	6.7	3.5	4.7	3.8	—
キ 口や目をピクピク			—	2.0	2.9	1.9	—	2.4	1.2	2.2	—
E 体 の 調 子											
ア 頭痛・腹痛 a)			9.5	6.3	5.7	7.1	10.0	10.5	9.3	8.1	1.6
イ つかれやすい a) b)			23.8	12.9	28.6	11.7	26.7	14.6	26.7	8.1	3.3
ウ ふとらない a) b)			23.8	37.5	17.1	36.2	20.0	34.8	19.8	35.1	—
エ 自家中毒			4.8	7.2	2.9	3.6	—	4.2	2.3	5.1	—
オ ぜんそく a)			4.8	5.9	5.7	5.5	—	2.8	3.5	4.7	—
カ ひきつけ a)			9.5	3.9	8.6	1.6	6.7	1.4	8.1	2.4	—
キ 顔色が悪い a)			14.3	12.8	5.7	7.8	3.3	8.0	7.0	10.0	—
ク 元気がない a)			4.8	6.3	2.9	2.3	3.3	3.5	3.5	4.0	—
ケ 中痢しやすい a)			4.8	4.6	—	2.3	3.3	4.9	2.3	3.9	1.6
コ 吐きやすい a)			—	8.9	2.9	7.1	—	3.1	1.2	6.4	—
F 性 質											
ア 思いきっていけない			28.6	34.9	31.4	35.3	23.3	28.2	26.7	32.8	23.0
イ かげひなた			4.0	4.6	8.6	6.8	16.7	2.1	10.5	4.5	4.9
ウ 人のすききらい			9.5	14.8	5.7	9.1	20.0	18.8	10.5	16.5	13.1
エ 友人になじまない			19.0	7.2	20.0	11.0	13.3	7.3	14.4	8.7	4.9
オ 先生になじまない a) b)			—	11.2	—	6.8	—	5.2	—	10.0	—
カ けっべき性 a) b)			4.8	17.4	5.7	18.8	—	22.0	3.5	19.4	4.9
キ しつっこい a)			14.3	33.9	22.9	27.5	33.3	20.0	24.4	27.8	4.9
ク うたが深い			4.8	5.3	8.6	7.1	3.3	8.4	5.8	6.9	3.3
ケ うそをつく a) b)			4.8	5.6	20.0	7.1	26.7	6.3	18.6	6.5	—
コ 落着がない a)			38.1	43.8	34.3	30.7	36.7	24.3	36.0	34.2	13.1
サ 神経質 b)			9.5	24.0	5.7	23.3	16.7	19.2	10.5	22.2	19.7

a) 普通学級(跡見)低学年児童とS小学校(普通学級)第1学年児童の比較から } 統計学的に有意差のある項目  
 b) 精神薄弱学級児童全体と普通学級児童(跡見)全体の比較から

表 8 問題行動調査の結果

調査項目	精神薄弱学級				S小学校
	人数	低学年	中学年	高学年	1年生
		21	30	30	81
		%	%	%	%
<b>A 破壊行動</b>					
ア おどす, 暴力を加える a)		19.1	3.3	20.0	13.6
イ 気性がはげしく, かんしゃくもち a)		14.3	16.7	36.7	23.5
ウ ボスになって人をうごかす		4.8	6.7	10.0	7.4
エ ひとの活動を妨害 a)		28.6	6.7	10.0	13.6
オ ひとのものを大切にしない a)		23.8	16.7	3.3	13.6
カ きたないことば, 敵意にみちたことば		9.5	13.3	33.3	19.8
<b>B 多動傾向</b>					
ア ペチャクチャおしゃべり		19.0	23.3	26.7	22.6
イ 部屋や広間を走りまわる, とびはねる a)		19.0	—	10.0	8.6
ウ 動きまわっている a)		42.9	10.0	20.0	22.2
<b>C 気がかりな習慣 (くせ)</b>					
ア 奇癖 a)		14.3	—	—	3.7
イ 何でもおいをかぐ a)		9.5	10.0	3.3	7.4
ウ よだれをたらす, つばをはく a)		19.0	10.0	3.3	9.9
エ 衣服をみだりにぬぐ, ひきさく		—	3.3	3.3	2.5
<b>D 自傷行為</b>					
ア 自分のからだをひっかいたり, つねったりして傷つける		—	—	3.3	1.2
イ からだにかみつく		—	6.7	—	2.5
ウ からだをたたく		—	3.3	6.7	3.7
エ 傷口をいじる a)		9.5	13.3	10.0	11.1
オ 自分の耳や目や鼻に物をつっこむ		—	3.3	6.7	3.7
<b>E 自閉の傾向</b>					
ア 極度に自閉的でまったく動きがない		—	3.3	—	1.2
イ 自閉的でいくぶん動きがある a)		4.8	3.3	3.3	3.7
ウ ひっこみがちではすかしがりである a)		14.3	3.3	3.3	6.2
<b>F 反抗的な行為</b>					
ア きまりを無視 a)		23.8	16.7	16.7	18.5
イ 指示, 要請, 命令にしたがうことを拒む a)		28.6	30.0	20.0	25.9
ウ 指導者に対してなまいきで反抗的 a)		9.5	10.0	30.0	17.3
エ 逃げたり, 逃げようとする a)		28.6	3.3	10.0	12.3
オ きめられたことにおくれる, さぼる a)		14.3	10.0	23.3	16.0
カ 集団の中でよくない行いをする a)		19.0	—	13.3	9.9
<b>G その他</b>					
ア てんかん, 発作		9.5	3.3	20.0	11.1
イ 薬物の使用		9.5	6.7	20.0	12.3

a) 精神薄弱学級児童とS小学校第1学年児童のあいだに, 統計学的に有意差のある項目

たべ, 頻尿, ことばのおくれ, ひとりごと, おしゃべり, 着物をかむ, 爪かみ, 頭痛, 腹痛, つかれやすい, ふとらない, ぜんそく, ひきつけ, 顔色が悪い, 元気がない, 吐きやすい, 先生になじまない, しつこい, うそをつく, 落ち着かないの21項目に有意差を認めた。これらの項目の出現率は, S小学校1年生児童のほうがすべて低かった。

さて, 次に, 跡見氏の調査した普通学級の児童と本調査の精神薄弱児学級の子どもたちについて比較するとき, 有意差の認められる項目が14項目あった。精神薄弱児の出現率が普通児に比べて有意に少ない項目は, 偏食, ふとらない, 先生になじまない, けっべき性, 神経質といった5項目だった。東京の児童に比べ島根県の児童は調査項目の出現率が低いのだが, 神経質の項目だけ

はS小学校1年生の出現率が19.7%であるのに対し, 精神薄弱児低学年児童のそれは9.5%と有意に低い。精神薄弱の子どもには神経質な子が少ないということが推定できる。

精神薄弱児の出現率が普通児に比べて有意に高い項目は, 頻尿, 遺糞, ことばのおくれ, 赤ちゃんことば, ひとりごと, 発音不明, つかれやすい, うそをつくの9項目となった。これら9項目のうち7項目までが排せつと言語の問題に集中しており, これらの問題へのとりくみが今後の特殊学級の教育の課題の1つとなると考える。

#### b 問題行動調査

AAMD で作成した適応行動尺度第2部を参考に質問項目をつくり, 破壊行動, 多動傾向, 気がかりなくせ, 自傷行為, 自閉の傾向, 反抗的な行為についての調査を

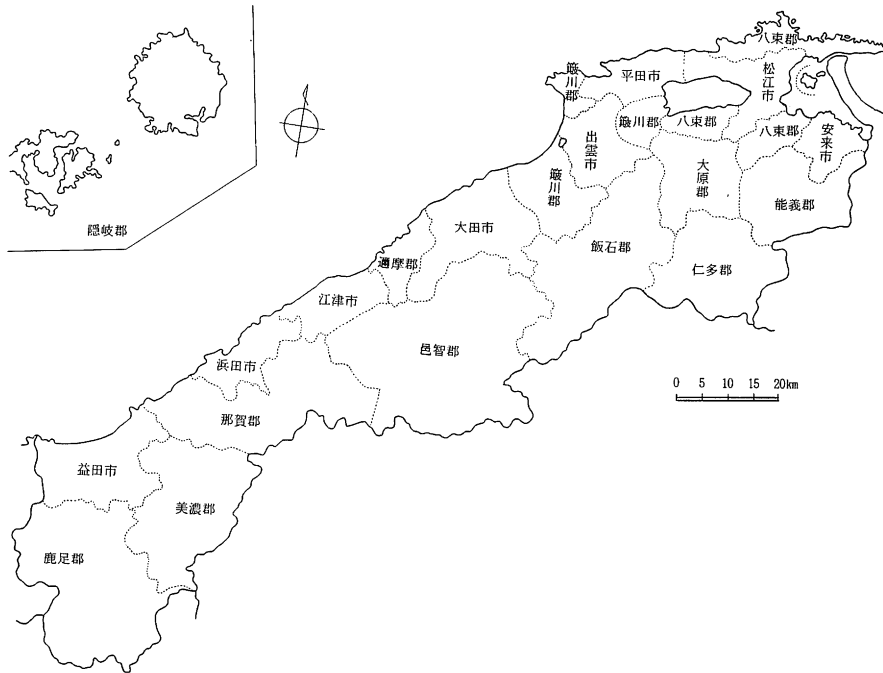


図1 交流を行なっている地域

81名の精神薄弱児と61名のS小学校1年生児童について実施した。結果は表8のようになったが両者を比較して、18項目で有意差を認めたがすべてで精神薄弱児の出現率が高かった。また、けいれん発作のある子どもが10%強認められた。

### III ま と め

昭和56年秋に島根県下の精神薄弱児学級の実態について行ったアンケート調査についての結果をまとめた。

1. 特殊学級在籍児童のうちの約50%が知的指数の51から75までの間の子どもだった。最近、IQ 値の低い子の入級の割合がわずかに増加している。
  2. 心理テストとして、WISC を採用している学級がもっとも多く、全体の約半数にみられた。
  3. 特殊学級担任教師のなかで約1割のものが10年以上の特殊教育経験者だった。
  4. 学習指導に遊びをとり入れているクラスがふえている。また、どの特殊学級でも何らかの形の交流を行っている。
  5. 普通児に比べて、精神薄弱児のなかに排せつやことばの問題をもつ子が多い。
  6. 自分のからにとじこもったり、攻撃性を外に向けてたりする精神薄弱児がみられる。
- 心身障害児教育の義務制が実現してから、精神薄弱児

教育も新しい出発を要請されている。子どもたちの発達の可能性を追求するとともに、彼らを情緒的に支持し、情緒的安定のための手だてを考えることもこれからの特殊教育の課題の1つであろう。

本論文は藤田正一と内田祥治の昭和56年度教育学部卒業論文にもとづいて書かれたものである。本調査のために御協力頂いた島根県下の小学校長と特殊教育担任教師に深く感謝します。

### 引用文献

- 1) 文部省初等中等教育局特殊教育課：特殊教育資料，昭和56年度，1981。
- 2) 跡見一子，宮崎照子，小林提樹：学童の生活行動調査（I）。小児の精神と神経，15；11～16，1975。
- 3) 跡見一子，宮崎照子，小林提樹：学童の生活行動調査（II）。小児の精神と神経，18；45～47，1978。
- 4) 若槻力夫：島根県・特殊学級（精神薄弱）児童生徒の教育課程の実態，精神薄弱児研究，216；14～19，1976。
- 5) 森上史郎，柚木腹：障害児をもつ子どもの遊びの日常指導，教育出版，1976。
- 6) 位頭義仁：ちえ遅れの子どもの統合・交流教育，教育出版，1979。